

# 図書館 だより

令和元年(2019年)夏 No. 342

- 令和元年度 被爆体験継承事業 企画展  
「ヒロシマの記憶を伝える ～町と人々の暮らし～」・1面
- 歴史を探り、魅力を発信！  
「ウィキペディアタウン in 広島（若者編）」・・・2面
- 図書館は、地域のみなさんと共に歩んでいます・・・3面  
あさ閲覧室は、5月に20周年を迎えました  
西区図書館は、10月に30周年を迎えます
- 図書館司書がおすすめするこの1冊！・・・・・・・・・・4面
- 休館日のお知らせ 7月～9月・・・・・・・・・・4面

令和元年度 被爆体験継承事業 企画展

## ヒロシマの記憶を伝える ～町と人々の暮らし～



【広島県東部の広島県工業博覧会館（原爆ドーム）（昭和13年）  
資料提供：原爆資料館 原爆資料館/撮影

開催期間 令和元年7月6日(土)～9月1日(日)

会場 広島市立中央図書館 2階 展示ホール

### 企画展の内容

- ・当時の町並みを伝える手記や証言集
- ・昭和初期の広島中心街の様子を撮影した貴重な写真、記憶をもとに戦前の広島を鉛筆で描いたスケッチ画集
- ・広島平和記念資料館（中区中島町）の地下に眠る戦前の暮らしを伝える被爆遺構の調査報告 など

広島市立図書館では、原爆の実相を伝え、被爆体験の継承と平和意識の向上を図るため、原爆・平和に関する資料の収集・保存・活用を行っています。

その一環として中央図書館では、毎年、被爆体験継承事業を行っており、今年度は「被爆前後の町と人々の暮らし」に焦点をあて、企画展と関連イベントを開催します。

企画展では、戦前の町の存在や人々の日常の暮らしを身近なものとして実感できるように、図書館所蔵資料や写真パネルなどでご紹介します。



企画展の様子

7月21日（日）には、関連イベント「ヒロシマの記憶を伝えること」を開催しました。

東京大学大学院教授の渡邊英徳氏は、被爆者の体験等の資料をインターネット上で共有する「ヒロシマ・アーカイブ」について説明し、詩人のアーサー・ピナード氏は、紙芝居『ちっちゃいこえ』（童心社 2019年）が生まれた経緯を紹介するとともに、同作品の実演も行いました。また、高校生の庭田杏珠さんは、AI（人工知能）技術を用いて広島の白黒写真をカラー化するプロジェクト「記憶の解凍」について、自ら中心メンバーとして取り組んだ事例を発表しました。

その後の対談では、これらの取組は表現手法こそ異なるものの、資料や作品等の公開により「平和」や「原爆」に関心を持たない人に対して目に触れる機会や考えるきっかけを創出し、「伝える」という目標にまい進しているとの共通認識が示されるなど、熱気あふれるイベントとなりました。

今夏、被爆前の町や人々の暮らしにふれ、それを一瞬で奪い去った原爆の恐ろしさ、戦争の悲惨さを知ること、あらためて平和への思いを共有し、ヒロシマの記憶を次世代に「伝え続けること」の大切さを考えてみませんか。